

〔第24回 学術集会 学術集会長企画〕

## 量的研究と質的研究の統合 (Synthesis Research) —既存の知見を統合する—

神戸大学大学院保健学研究科家族看護学分野・家族支援CNSコース

本田 順子

量的研究と質的研究の統合(Synthesis Research)について紹介する。Synthesis Researchとは、ある特定の疑問やトピックに関連のあるすべての研究を要約することである。筆者は、Dr. KnafelzらのFamily Synthesis Projectに参加し、ミックス法による既存の知見の統合として、心疾患をもつこどものウェルビーイングと家族の変数の関係について明らかにした。医学、看護学だけでなく、「家族」を扱う学問領域である社会学、心理学なども含む9つのデータベースを用い、心疾患をもつこどもとその家族の研究について文献検索を実施した。こどもに関する変数（心疾患の重症度、抑うつ、QOL、問題行動など）と家族に関する変数（家族機能、母親の抑うつ、育児態度など）の相関分析を含む文献を抽出（12本）し、メタアナリシスを実施した。

メタアナリシスの結果、こどもの変数に関する家族の変数には“parenting”に関するものが多く、相関が高いことが明らかとなった。そこで、質的研究の文献から“parental experience”というコードを付与した質的データを抽出、分析し、結果を統合した。

多くの家族看護学研究の結果が蓄積されると、Synthesis Researchが可能となり、EBPに必要なエビデンスとなる。一つひとつの研究が家族員個人に焦点を当てられていたとしても、“統合”することによって家族システムユニットとしてのエビデンスになる可能性がある。Synthesis Researchをするためには、一つひとつの研究の質を担保すること、リサーチクエスションに合わせた対象（分析単位）を設定することが課題となる。

## メタ統合（質的研究の統合）家族の役割から相互作用の パターンを描き家族支援を検討する

聖路加国際大学大学院

小林 京子

今回は、小児がん経験者とその家族を取り上げ、家族役割からの相互作用パターンを見出すメタ統合の研究を紹介し、研究が家族支援にどのように結びつくのかという、臨床活用の可能性について述べる。

システムとしての家族は、家族全体と家族員が適切な役割を持ち、それを発揮することで家族の健康を維持している。子どもが小児がんと診断されると、役割は状況的そして発達的に変化にあわせて継続的に調整されなければならない。小児がん経験者は合併症を持ちながら小児期から成人期への発達を遂げ、家族全体は養育期から子どもが自立する排出期へと発達する。メタ統合ではその過程における家族の相互作用と家族のゴールを記述した。小児がん経験者家族は、相互依存的な家族役割を持ち、その役割は「曖昧で動的」であった。すなわち、家族員間で「支える」役割・「支えられる」役割を相互依存的に行っており、

経験者の合併症が強く家族でのコンディション・マネジメントが困難で、医療者からの支援も不十分である時、経験者と家族は治療経験からのトラウマとサバイバーシップの不確かさへの不安が強くなる相互依存的役割が抽出された。一方、小児がん経験者の合併症のコントロールを家族で行え、家族員それぞれのセルフケア能力も高く、医療者からの支援も得られている場合には、小児がん経験者と家族が発達に見合った自立をゴールとした相互依存的役割を形成していた。

メタ統合で家族の相互作用を明らかにすることで、家族としてのゴール達成における看護支援ニーズと介入する箇所を検討する手がかりを得た。また、家族は家族員と家族全体の自立に向かって相互依存的に役割を果たしているため、家族員個人のみへの支援では十分ではないと言える。